認知症患者スローに買い物

付き添いや優先レジ、手間取っても安心

スーパーやコンビニ対応拡大

医師「生きがい維持、症状にも好影響」

認知症の人や高齢者がレジで手間取っても安心して買い物できるよう、「スローショッピング」とうたって優先レジを設けるなどの取り組みをするスーパーやコンビニが現れている。買い物は生活の中での喜びになっており、専門医は「生きがいを奪わないことで、認知症の症状にも良い影響を与える」と意義を説明している。

ボランティアの女性らと買い物する桜野順子さん（中央）。左は夫の正之さん＝いずれも岩手県滝沢市の「マイヤ滝沢店」

「豆腐は木綿でいいですか」「ありがとう」

岩手県滝沢市にあるスーパー「マイヤ滝沢店」。車いすに乗った桜野順子さん(84)は欲しい物を手にすると、付き添いの女性ボランティアに笑顔を見せた。買い物を終えると「ゆっくり会計」との表示がある「スローレジ」へ。手を借りながら自分でお金を出し、店員がゆっくり数えながら、お釣りを渡した。

桜野さんは認知症が進行しているが、買い物が楽しみの一つ。自宅で介護する夫の正之さん(74)は「妻の笑顔が見られるのは、私にとってもありがたい」と話す。

店がこうした取り組みを始めたのは2019年。地元の開業医、紺野敏昭さん(73)が運営会社の会長と社長に掛け合って実現した。

紺野さんは認知症の患者から「レジで後ろの客にせかされた」「家族から『迷惑だから行かないで』と言われた」といった話を聞いていた。でも本人は行きたがっている。「特に、主婦だった女性にとって役割を奪われる喪失感は大きい。買い物は自信や症状の安定につながる」

高齢者ら向けの「スローレジ」で会計する桜野順子さん（手前左）と女性ボランティア

店は毎週木曜午後の1～2時間、スローレジを実施。目線が下に行きがちな高齢者向けに、陳列棚の商品ジャンルを大きな字で床に表示するなどの工夫も施した。ボランティア十数人が手助けメンバーとして登録しており、客に付き添う。

取り組みは他の地域でも。中四国や九州でショッピングセンターなどを展開する「イズミ」（広島市）は64店でスローレジを実施。福井県民生協も全10店で「ゆっくりレジ」を導入している。

コンビニで実施しているのが京都市の「セブンーイレブン京都山科百々町店」。高齢化が進む地域で、店長の清水美奈子さん(60)は以前、戸惑いの連続だった。買った食べ物を店のトイレで広げて食べる高齢女性、ATMからお金を引き出せず苦情を言ってくる男性…。いずれも認知症があることが分かった。

近隣に住む人たちで、日々顔を見かける。「ほっとかれへん」と清水さん。店員と共に認知症サポーター養成講座を受講。店員が買い物に付き添い、何度も同じ物を買おうとした場合は、傷つけないよう言葉をかけて棚に戻す。他の客を待たせないよう空きスペースへ誘導し、手持ち型レジで会計する。

清水さんは「地域で商売する者として、お客さんが望む生活を続けられるようにしたい」と話した。

(C)神戸新聞社 無断転載 複製および頒布は禁止します。